



# 田中絹代 特集

**会場** 農業屋コミュニティ文化センター

〒515-0818 松阪市川井町690 ☎ 0598-23-2111

令和7年 **1/10** **金** 開場 12:15

かんざし

「**簪**」 1941年/松竹/監督=清水宏/出演=田中絹代、笠智衆

13:00~14:10 ◆解説14:20~14:50

「**恋文**」 1953年/新東宝/監督=田中絹代/出演=森雅之、久我美子

15:00~16:37

申込不要

料金 500 円(1日)

定員 500 人



「簪」1941年 田中絹代、笠智衆



「西鶴一代女」1952年 田中絹代



「恋文」1953年 久我美子、森雅之

令和7年 **1/11** **土** 開場 9:15

「**西鶴一代女**」 1952年/新東宝・児井プロ/監督=溝口健二/出演=田中絹代、三船敏郎

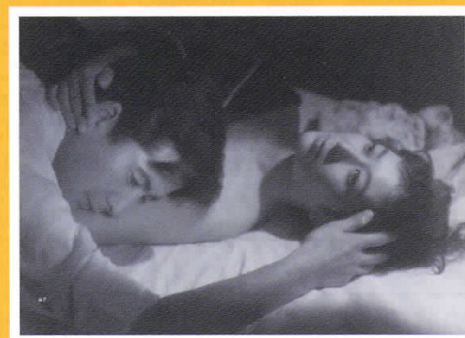
10:00~12:16 ◆解説12:30~13:00

「**乳房よ永遠なれ**」 1955年/日活/監督=田中絹代/出演=月丘夢路、森雅之

13:10~15:00

## 田中絹代の名作をスクリーンで楽しむ2日間

映画史にその名が克明に刻まれたスター・田中絹代(1909-1977)。松阪ゆかりの映画監督・小津安二郎のサイレント映画では可憐なヒロインを演じ、欠かせない存在でした。その代表的な出演作と近年高い注目を集める監督作品を貴重な35mmフィルムで上映します。幕間に小津安二郎との関係を交えて講師が解説を行います。



「乳房よ永遠なれ」1955年 月丘夢路、葉山良二



- 主催者 松阪市/国立映画アーカイブ (上映会は令和6年度 優秀映画鑑賞推進事業の一環です)
- 特別協力 文化庁/一般社団法人日本映画製作者連盟/全国興行生活衛生同業組合連合会/株式会社 KADOKAWA
- お問合せ: 小津安二郎松阪記念館 (松阪市立歴史民俗資料館2階) ☎ 0598-23-2381



## 『簪』

1941年 松竹(大船) 白黒／スタンダード／モノラル／70分
監督：清水宏 脚本：長瀬喜伴 原作：井伏鱒二
出演：田中絹代、笠智衆、斎藤達雄、日守新一、三村秀子
井伏鱒二の短篇を映画化。山梨県下部温泉を舞台に、若いふたりの出会いを描く。普段は東京で愛人として困われた生活を送る恵美(田中)は、自分が湯船に落とした簪で傷病帰還兵・納村(笠)に足のけがをさせてしまう。恵美は納村の歩行練習を手伝いながら、温泉に逗留することに。納村をはじめ、口うるさい先生、妻の意見に頼りきりの若旦那、おじいちゃんと一緒にきた夏休みの小学生兄弟など、個性的な宿泊客たちとの温かい交流のなかで、恵美は自らの人生を見つめなおす。温泉地ののんびりとした空気を見事に表現しつつ、日中戦争勃発後の情勢や、男性に困われて生きる女性の置かれた立場など厳しい現実も描きこみ、情緒と現実、親密さと孤独といった正反対の情感が見事に共存する清水宏の代表作の一本。田中絹代の繊細な演技が作品により一層の深みを与えている。

## 『恋文』

1953年 新東宝 白黒／スタンダード／モノラル／97分
監督：田中絹代 脚本：木下恵介 原作：丹羽文雄
出演：森雅之、久我美子、宇野重吉、道三重三、田中絹代、入江たか子
戦争から帰還した礼吉(森)は、女性たちが米兵に送る恋文の代筆業をしながら、かつて想いを寄せた道子(久我)の行方を追うが…。1924年の松竹入社後、スターとして数々の名作を生み出してきた田中絹代による記念すべき監督デビュー作。戦後、年齢による役の狭まりを感じていたが、1949年の訪米時の見聞に触発された田中は、「日頃考えていることを全体的に表現してみたい、それにはやはり監督にならなければ駄目だ」と監督になることを目指す。成瀬巳喜男の『あこいもうと』(1953)の現場で2ヶ月の助監督経験を積んで本作に臨み、映画『初姿』(1936)を監督した坂根田鶴子以来となる、物語映画の女性監督となった。戦後の厳しい現実のなかで生きる道子たち女性の姿以上に、礼吉に焦点が当てられ、いまだ良き日々の思い出と戦前の感性を捨て去ることのできない姿が、悲愴感が漂うまでに克明に描かれている。入江たか子らスターたちのカメオ出演も見どころ。

## 『西鶴一代女』

1952年 新東宝・児井プロ 白黒／スタンダード／モノラル／136分
監督：溝口健二 脚本：依田義賢 原作：井原西鶴 監修：吉井勇
出演：田中絹代、山根寿子、三船敏郎、宇野重吉、菅井一郎
原作は井原西鶴の「好色一代女」である。原作の女主人公は、生来の好色から数奇な男性遍歴を重ね、封建制度の下で自由奔放な性を謳歌する女性として描かれている。映画化にあたって監督の溝口健二と脚本家の依田義賢は、女主人公の自己主張や被害者意識を極力排し、男性本位の都合で不思議な一生をたどってしまう女を、客観的に凝視する手法で描いている。社会の底辺で生きている女は、ふと入ったお寺の五百羅漢を見ているうちに、過去に出会った男達の顔を次々に思い浮かべる。そこで生まれた悲喜こもごもを静かに回想し終わると、女は何処ともなく闇の彼方へ去っていくのだった。田中絹代は十代から年老いた姿まで全身全霊で演じ切り、本作は1952年のヴェネチア国際映画祭で国際賞を受賞。以後この作品は「お春の一生」の題で日本映画を代表するようになり、フランスをはじめとする欧米各国で溝口監督は神格化されることになった。

## 『乳房よ永遠なれ』

1955年 日活 白黒／スタンダード／モノラル／110分
監督：田中絹代 脚本：田中澄江 原作：若月彰、中城ふみ子
出演：月丘夢路、森雅之、杉葉子、川崎弘子、大坂志郎
夭折の歌人・中城ふみ子の歌集に感銘を受けた田中絹代が、「演出者としての全生命を打ち込んだ作品にしたい」と臨んだ監督第3作。短歌作りに打ち込むふみ子(月丘)は、身勝手な夫に疲れ子どもを連れて実家に戻るが、乳がんにも冒される。田中絹代は本作で、監督として初めて女性脚本家と組んだ。歌人でもある脚本家・田中澄江は、実話をもとに表現者としての苦悩や女性同士の繋がりを緻密にシナリオ化している。月丘夢路は、監督の熱意に応えるかのように、乳がん手術で乳房を失った女性の欲望や感情の機微を見事に表現。代表作とされる本作をはじめとして、田中絹代が監督した6本の作品は現在世界的に高い注目を集めている。

各日の幕間に映画監督・小津安二郎との関係を交えて講師が解説を行います。

講師：藤田明(東京出身。三重県で高校教員、のち高田短期大学教授。全国小津安二郎ネットワーク顧問)

聞き手：岩岡太郎(小津安二郎松阪記念館研究員)

10日 14:20~14:50 11日 12:30~13:00